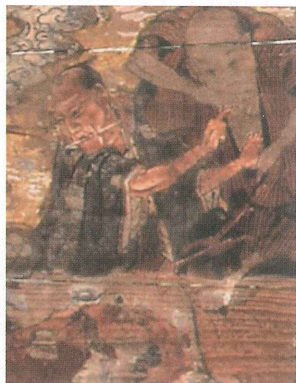


板絵着色老翁奇瑞の図（北溪筆）



〔指定年月日〕平成七年一月二九日
 〔種別〕有形民俗文化財（信仰）
 〔名称〕板絵着色老翁奇瑞の図（北溪筆）
 〔点数〕一面
 〔所有者等〕妙法寺
 〔所在地等〕堀ノ内三―四八―八



板絵着色老翁奇瑞の図（北溪筆）

本絵馬は、桐材横長矩形型（全体は一九六・〇cm、縦二〇・〇cm）で、葛飾北斎の高弟である魚屋北溪、文政四年（一八二二）の作である。

額は桐板を割削、隅金具、笹金物そして、寺紋の井桁に橘の飾金具を配し、漆塗りの装飾がなされている。図柄は金箔地の画面中央に「南無妙法蓮華経」の髷題目と湧き上がる雲、その左右に日月を配し、右には口に筆をくわえた初老の男性と、その傍らに寄り添う男性、左端には扇を広げ刀を携えた男性が座し、手前に一二人の老若男女が手を合わせて、題目と初老の男性を囲むように描かれている。

本絵馬の主人公とおぼしき男の筆を口にした面貌は極めて個性的で、従来葛飾北斎晩年の肖像と信じられてきた図像と多分に重なるところがある。北斎の肖像については従来その肖像性について疑問の声もあったが、この絵馬の像の主は、北斎本人と面識のあった溪斎英泉や歌川国芳など第三者の浮世絵師によって描かれた肖像とも通じているので、従来その説を補強することになる。なお文政四年は北斎六二歳の年にあたり、頭髪の様子はその年齢の肖像に相応のものと思われる。日蓮宗信仰の奇瑞にまつわる場面を描いた本絵馬は、妙法寺の庶民信仰の一端を示すとともに、浮世絵魚屋北溪の有年紀作品として貴重である。

【文化財所在地】

